

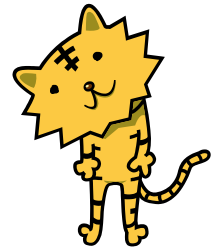
商標へのこだわりと価値の発生

～ ケーススタディ：アシックス② ～

「オニツカタイガー」という名前の由来は、鬼塚会長の姓をとっていることはわかりますが、「タイガー」はどこから来たと思いますか？これもまた、鬼塚会長の「縁」がもたらしたものです。

1950年、鬼塚会長が靴の製造を学びに行ったときに、虎印のマークを目にします。そのマークは、工場長の名前が「寅一」さんだったことから、自分の目印として使っていたものでした。

鬼塚会長は、「一夜にして千里を走る」たくましい虎の強さと俊敏性こそスポーツシューズの名前としてはふさわしいと考えました。そこで、工場長に「虎印」を譲ってくれるよう頼むと、快く譲ってもらうことができ、鬼塚会長はこの「虎印」を商標登録しようとして



しかし、その「虎印」は大正8年に商標登録されていて許可が下りませんでした。鬼塚会長は名前を変更し「オニツカス・タイガー」として再度申請して許可をもらいます。

しかしその後、商標関係の法律が変更され、運動靴が一般的な靴の分類に当てはまらなくなります。そのため、一般的な靴の法律では「オニツカス・タイガー」は認められていましたが、「運動用特殊靴」の法律では認められなくなってしまいました。「美津和・タイガー」という商標が先に登録されており、「タイガー」という部分がかぶっていて紛らわしいためです。



どうしても「虎」を自社の商標として登録したい鬼塚会長は、「虎印」を大正8年に登録した人を探し当て、正式にこの商標を買い取ることができました。

工場で見かけた「虎印」に魅力を感じた鬼塚会長が、自らの足で自分のものにした商標ですが、その本当の価値は虎の強さと俊敏性を持った鬼塚会長の営業力と改善能力によって生み出されていました。彼は商標にこだわる一方で、タイガーのバスケットボールシューズを全国に浸透させるため、インターハイや国体、日本選手権などのビッグイベントには必ず顔をだし、会場の片隅に商品を並べて選手たちに直接アタックしました。タイガーという名前は知らなくても、選手たちは商品の価値を品物のよしあしで見てくれるということ全国の学校を回っていて感じていたのです。意見を言ってもらって次に会うときまでに必ず改良するという地道な取り組みの繰り返しこそが、タイガーの価値を確実に向上させたのです。